



2017(平成29)年7月25日発行

発行/大阪大学医学部附属病院広報委員会(総務課)

住所/〒565-0871大阪府吹田市山田丘2-15

TEL/06-6879-5021

<http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp>

禁転載(この紙面は再生紙を使っています)

放射線治療機器 リニアック 最先端機種が稼働



一人ひとりの患者さんに合った 負担の少ない放射線治療を提供

放射線治療部では、5月から最新式リニアック(放射線治療機器)が稼働しています。ターゲットである病巣に対して、より正確で効果的な照射を行えるほか、治療時間も大幅に短縮され、患者さんの負担も軽減しています。

回転しながら連続照射 照射の強弱も自動調整

リニアックは、電子を加速させてターゲットに当てることで発生するX線を使用し、体の外側から放射線治療を行う外部照射装置です。当部では昭和63年より、ロボットアームに軽量のリニアックを搭載した「サイバーナイフ」による治療を開始し、X線をかんな病巣の形に合わせて照射できる強度変調放射線治療(IMRT)などの高精度治療も積極的に進めてきました。

従来のリニアックは、装置を患者さんの真上や斜め上など5〜7方向の角度にセットし、その都度患者さんの体の位置を変えて照射する必要がありました。今回導入した新機種は、X線を放射する装置を回転させながら連続照射できるほか、照射の範囲や速度、形状を設定できるMLC(マルチリーフコリメータ)も装備されています。照射の有無や強度を自動的に調整しながら治療を行い、一回転に要する時間は1分。ほとんどの場合、2回転で一回の治療が完了します。これまでは平均12〜13分ほど要していた治療時間が2分ほどに大幅に短縮されたことで、寝台の上で静止が求められる患者さんの身体的・精神的負担が軽減しました。

6軸駆動の寝台で 位置合わせの精度も向上

放射線治療は、毎回同じ部位に照射する必要があり、治療直前に治療計画と実際の照射部位が合っているかどうかを確認します。新機種は、治療直前にリアルタイムのCT画像を寝台の上で撮影でき、従来は確認が難しかった部分まで判別できるため、照射部位の微小なズレを正確に修正できます。さらに、従来の寝台の3軸(縦・横・高さ)に回転軸が加わった6軸駆動で、治療する部位への照射の位置合わせがさらに高精度になりました。これにより、正常組織に対する線量をこれまで以上に減らすことが可能となり、合併症などのリスク軽減が期待できます。



X線を放射する装置を回転させながら連続照射できる。治療時間が大幅に短縮され、患者さんの身体的・精神的負担が軽減。

「新機種の導入により、一人ひとりの患者さんの病巣や症状に合わせた、より低侵襲でより効果的な放射線治療が可能となってきています。また、治療時間が短くなりましたので、より多くの患者さんに治療を受けていただくことができるようになり、地域に生き世界に伸びる」という大阪大学のモットーにあるように、今後、より高精度の放射線治療を地域の方々に提供し、全国的な放射線治療の発展にも貢献したい」と、小川和彦部長は今後の展望を語っています。

携帯(au)の電波状況が改善しました



患者さんからご要望が多かった携帯電話の電波状況改善のため、外来棟にau中継器を設置し、3月1日から運用を開始しました。設置場所は、外来棟1〜3階の携帯電話通話可能エリア内と、売店・食堂エリア内で、計4カ所です。大規模災害などの緊急時にも、緊急通報や災害時優先電話をはじめ、安否確認のための通信がしやすくなりました。現在、NTTドコモとも電波状況改善のための交渉を進めており、携帯電話の利便性向上に向けて順次整備を進めてまいります。

障がい者用トイレの 美装工事を実施しました



外来棟1階の障がい者用トイレが経年劣化していたため、壁面と床面の美装工事を昨年12月に実施しました。

工事前は、塗りの表面がひび割れた箇所から剥がれており、壁のシミや汚れ、床の黄ばみも清掃では除去が難しい状態でしたが、美装工事により、患者さんや来院される方に気持ちよく使っていただけるようになりました。また、手を乾かすためのエアータオルも新たに設置しました。

本院では今後も患者さんへのサービス向上を常に目指し、施設整備に取り組めます。

平成29年 春の叙勲

末久 悦次

前臨床(衛生)検査技師長

瑞宝単光章

「臨床研究センター」設置

質の高い臨床研究・治療の実施を 世界レベルの被験者保護のもとで目指す

4月より、未来医療開発部に「臨床研究センター」が設置されました。アカデミアの医療技術シーズ実用化のための橋渡し研究を行う未来医療センター、臨床研究・医師主導治療のデータマネジメント・統計解析を支援するデータセンター、グローバルヘルスに貢献する国際医療センター、そしてこの度新設された臨床研究・治療の実施を支援する臨床研究センターの4センターが一元的に連携し、医薬品・医療機器等の新規医療技術を実用化し、世界の人々の健康に貢献していきます。

臨床研究センターは、「臨床試験管理グループ」、「CRC(臨床研究センター)」、「臨床試験センター」、「臨床試験センター」の4センターから国立大阪大学病院では日本最

総合周産期母子医療センター 分娩台がリニューアル



総合周産期母子医療センターには、3つの陣痛分娩室があります。2月に分娩台をはじめとする分娩周辺機器をリニューアルし、妊婦さんにより安全に、より快適に、分娩に臨んでいただけるようになりました。

新しく導入した分娩台では、妊婦さんが体の位置を簡単に変更できるようになっています。また、各陣痛分娩室にディスプレイを設置し、他の部屋で進行中の分娩の胎児心拍モニタリングも同時に確認できるようになりました。医療用照明器具である无影灯も刷新し、羊水検査をはじめとする妊娠中の各処置や分娩後の会陰裂傷縫合の際に、医師にとってより良い視野の確保ができるようになりました。本院では今後も、妊婦さんにとってより安心な環境を提供していきます。



山本洋一臨床研究センター長

「私たちの最終目標は常に患者さんへの還元です。苦しんでおられる患者さんに、より良い治療方法や機器を安全・迅速に提供したい。ホームペー ジなどを通じて患者さんと コミュニケーションをとり、患者さんのニーズを把握した うえで臨床研究を進めること や、患者さんに最新の治療・ 治療情報などを提供できる患者さん目線からのシステム構築を進めていきたいと考えています。励みであり、お叱りであれ、是非患者さんからご意見をいただきたいです」と山本洋一臨床研究センター長は語っています。

多くの治療を実施しており、さらに現在は日本のリーダーとして、国内の他施設支援を強化するとともに、世界で同時に行われる医師主導国際共同試験への参画を視野に入れて、欧州・米国・アジアなどの連携も図っていきます。また、世界レベルの被験者保護を実現するために、米国の被験者保護プログラム認証協会「AAHRPP」の認証に向けた準備も進めています。



PHOTO

TOPICS

「ミート・ザ・プロフェッサー」開催



初期臨床研修開始日の4月3日、研修医と指導医の親睦を深めることを目的に、「ミート・ザ・プロフェッサー」を14階スカイレストランで開催しました。

診療科長である教授たちが研修の心構えや各診療科の特色を説明した後、交流会が催され、研修医が指導医に臨床研修の内容やキャリアパスなどを相談したり、研修医同士が和やかに交流しながら、本院での臨床研修をスタートしました。

7/7 **セタコンサート**

薬剤部「あんさんぶら〜ず」による演奏を多くの患者さんが楽しめました。



阪大病院を見学してみませんか

本院では、下記のとおり見学会を開催いたします。普段は見ることのできない場所の見学や最先端の医療に触れるチャンスですので、お気軽にご参加くださるようご案内いたします。

- 実施日時 9月26日(火)14時~16時30分
- 申込締切 9月5日(火) **必着**
- 対象者 一般市民(成人、個人)
- 募集人員 15人

必要事項(①氏名 ②性別 ③年齢 ④郵便番号 ⑤住所 ⑥電話番号 ⑦あなたが阪大病院に抱くイメージ ⑧見学を希望する理由)を明記のうえ、はがき、FAXまたは電子メールによりお申し込みください。**必要事項に不備がありますと、こちらから連絡できないことがありますのでご注意ください。**(※いただいた個人情報は本見学会以外の目的には使用いたしません)

●送付先(問い合わせ先)
〒565-0871 吹田市山田丘2-15
大阪大学医学部附属病院総務課広報係
TEL:06-6879-5020,5021
FAX:06-6879-5019
(※非通知設定のTEL/FAXからは頭に186をつけておかけください)
e-mail:ibyousoumu-kouhyo@office.osaka-u.ac.jp

- 見学場所 ドクターヘリ、臨床検査部など(※都合により見学場所が変更になる場合があります)
- 決定通知 応募者多数の場合は抽選により決定し、参加の可否をはがきでお知らせします。
- 注意事項 **見学では、かなりの距離を歩きます。**階段の昇り降り等もありますので、歩きやすい靴でお越しください。

泌尿器科の重要性は日本の高齢化を象徴して年々高まっております。この数年で当科をめぐむ環境は大きく変化しつつあります。平成28年には前立腺がんが日本人男性のなかでも罹患率の高いがんとなりました。その前立腺がんに対する治療として導入されたロボット(ダ・ヴィンチ)支援下の前立腺全摘除術が、平成23年に保険収載されたことは泌尿器科領域において最も大きな



泌尿器科

前立腺がん治療のためのロボット「ダ・ヴィンチ」支援下手術を実施

な変化でした。現在本院では、年間約80件の前立腺がん手術をロボットで行っています。この手術を導入する前は、手術に輸血(自己血輸血を含む)がしばしば必要でしたが、ロボット手術の導入により、全く輸血なしで患者さんに手術を受けていただくことができようになり、現在では、北摂地域の大阪大学関連施設3カ所にこの手術用支援ロボットが導入され稼働しています。また、進行した前立腺がんに対しては新規の治療薬が次々と上市され、長寿大国である日本の医療を支えています。しかし、これらの薬剤は非常に高価であり、今後の日本の医療経済を考えると、より安価な国産の良い薬剤の登場に期待がかかります。本院ではホルモン療法に対して抵抗性となった前立腺がんに対する新規治療として、遺伝子

治療学講座の医師たちとともに、純国産の新規治療薬であるセンダイウィルスを用いた治療の開発に取り組み、現在医師主導型試験を行っています。将来的にはこれらの治療薬をさらに改良し、阪大ブランドの新規治療薬を世界に発信していきたいと考えています。

前立腺がんとともに増加の一途をたどっているのが腎がんです。検診の普及に伴う早期腎がん症例の増加はここ数年顕著であり、これら早期の小腎臓がんに対しては、手術以外に凍結療法が平成23年に保険収載されました。現在、本院は大阪府下で唯一の凍結療法設備を有する施設です。

小径の腎がんに対しては、前述のロボット手術も保険収載されており、本院では凍結療法とともに低侵襲手術として積極的に取り組んでいます。いずれもまだ始まったばかりですが、今後は症例が増加する



野々村祝夫泌尿器科長

異変に気付けばすぐに受診を！ 超急性期の脳卒中治療をより早く安全に完遂

脳卒中センター



左から脳卒中センターの坂口学副センター長、望月秀樹センター長、貴島晴彦副センター長、中村元副センター長

脳卒中は、脳の血管に何らかの障害が起きることで発症する病気の総称です。大きく分けて二つのタイプがあり、一つは脳の血管が詰まり血液が流れなくなってしまう脳梗塞と、もう一つは脳の血管が破れて出血する脳出血やくも膜下出血です。

脳卒中の最大の特徴は、今まで全く症状がなかった人に、急に片側の手足の動きが悪くなる、顔の片側がゆがむ、言葉がうまく出なくなるといった突発性の症状が発症することです。くも膜下出血の場合、多くは突然バットで殴られたような激しい頭痛で発症します。

日本における脳卒中は、がん、心疾患、肺炎に次いで死亡原因の第4位(平成28年)ですが、寝たきりなど重度要介護の原因としては最も多い疾患になっています。また、超高齢化がさらに進行する8年後には、患者数が約320万人に達するといわれており、重要な国民病の一つであると言えます。

当センターでは、軽症から最重症まですべての脳卒中患者さんを24時間体制で受け入れ、迅速な画像診断により的確に脳卒中の診断を行い、即座に適切な治療を開始しています。脳梗塞の場合、発症から4.5時間以内の症例に対しては「r-tPA(アルテプラゼ)静注血栓溶解療法」を行い、閉塞血管の再開通を促します。本治療が無効な症例や、適応外でも救済できる脳

これらの進行性精巣がん症例に対する腎部分切除術が保険収載されたことから、今後ますますロボット支援下手術の需要が増えるものと思えます。さらに、これら2種類のがん以外に当科が力を入れているのが進行性精巣がんの治療です。精巣がんは20~30歳代に好発するがんで、本院は

これらの進行性精巣がん症例の治療を全国で最も多く手がけている施設の一つです。治療後の妊孕性妊娠しやすさや性機能のケアも含めた診療に対して積極的に取り組んでいます。

その他、大学病院という特殊な状況下で、がん診療が当科の大きなウェイトを占めていること、対応できる体制を整えています。また、臨床面だけでなく、臨床に直結するようなトランスレーション的な研究にも力を入れています。

学内の基礎医学の教室や薬学部と連携しながら、がんに対する新規診断バイオマーカーの探索、治療標的となる新規分子の探索などを行っており、当科にとっての課題は多いですが、日本の医療の発展に少しでも貢献できるよう、科のスタッフ一同が一丸となって取り組んでまいります。

組織が多く残っている血管閉塞症例に対しては、閉塞部位から直接血栓を除去することで脳血流を再開通させる「血栓回収療法カテーテル治療」を行っています。近年、血栓回収療法の成績は飛躍的に向上しており、超急性期の脳梗塞患者に対してより安全で効果的な治療を提供できるようになっています。また、本院では、発症から治療開始までの時間を短縮するために、ドクターヘリを用いて遠方の患者さんの受け入れも行っています。その他、くも膜下出血や脳内出血の患者さんに対して、薬物治療、開頭手術、カテーテル手術などを駆使して、各患者さんに合わせた低侵襲かつ効果的な治療を提供しています。

事務部長おすすめ中華セット



昨年につづき、特製中華セットの第2弾を提供しました。今年のイチオシは、具だくさんの中華あんかけを、食べる直前にご飯にかけて召し上がったいたたく「中華丼」と、手作りごまだれの「棒々鶏風」。

患者さんからは「病院で中華は珍しい」、「中華が好きだから嬉しい」、「棒々鶏を普段も出してほしい」など、今年も大変好評をいただきました。

ある本院の特性上、がん、補助人工臓などの循環器系先進治療中、小児といった特殊な脳卒中を発症した患者さんが多数来院されるため、関連各科と協力しながら患者さん一人ひとりに合ったテーラーメイド治療を行うようになっています。また、教育活動として、若手医師の育成はもちろんです。脳卒中市民講座を年一回開催し、400名近い来場者に発症予防や発症時の即時対応について啓発活動を行っています。さらに、近隣の消防署・救急隊に対して、脳卒中を疑うべき症状や搬送時の注意点を、最速な搬送先など、「脳卒中病院前救護」に関する教育活動も行ってきました。

「脳卒中はすぐに症状がおさまるケースもありますが、救急隊への連絡を躊躇していると手遅れになる場合があります。一時的であっても、突発的な症状が出た場合は、すぐに救急隊に連絡してください。発病後すぐに脳卒中専門のセンターに搬送されることで、後遺症を軽減できる可能性が高くなります。とにかく1分1秒でも早く治療を開始することが大切です」と、望月秀樹センター長は語っています。